

昭和二十九年八月二十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三〇三号）

次

招喚の勅命……………近角常観……………(1)

求道の中心……………福島政雄……………(7)

池山先生のことども……………都崎雅之助……………(13)

池山栄吉先生を憶う……………東昇……………(16)

挽歌抄……………鎌田晃……………(19)

唯念仏のみぞ残れり……………花田正夫……………(21)

目

慈

光

第二十六卷

第八号

招喚の勅命

近角常觀

法然上人は諸種の行法で助かるに非ず、唯彼の本願に順うばかりが助かるべき道であると云われた。選択本願念仏集は、十六章に別れてあるが、その、

第一章は、道綽禪師の聖道門を捨てて浄土門に入られた文は此の如くである、道綽禪師の安樂集の文を引いてある。第二章は、善導大師が、雜行を捨てて、正行即ち念仏の一行に帰せられた文を引いてある。大師が念仏に帰したのは、彼の仏の本願に順するのであるから、次に阿弥陀如来、余行を以て往生の本願となさず、唯念仏を以て往生の本願と為すの文と題して、弥陀如来四十八願の中の第十八願文を引いてある。この仏の本願にしたがえば、一切の人類根器に上・中・下の三種あつても、三輩いづれも念仏の一つで往生を遂ぐべしとて、その次、即ち第四章に大無量壽經の三輩往生の文を引く。

第五章は、この念仏の功德の広大なることを示し、第六章は、この念仏は末世まで人を救うことを説き、第七章は

其他は仏の恵みを仰ぐというのでは、未だ絶対の恵みがあるわけぬのである。法然上人は、この念仏のために流罪にまで遭われたが、その流罪に処せられた当時にあつても「われたとい死刑に行わるとも、此念仏は止むべからず」とて、その気色はもっとも熾盛（しじよう）であつた。これだし、人生はこの南無阿弥陀仏の他なしという信念より、身に行い、口に述べられたのである。

しかし世の人々は上人の信仰を理解することが出来ないために、種々に上人を苦しめた。然し苦しめられる度にますます上人は喜ばれた。このように法然上人は善導大師の教にしたがつて南無阿弥陀仏の一心専念の信仰をもつて始終せられたのであるが、この法然上人の教をその通りに受けて、一毫の私意をまじえず、唯師教に従順せられたのが親鸞聖人である。もう一つ云うならば、法然上人の念仏は弥陀の本願である、弥陀の本願は一代仏教の精髓である、法然上人そのまゝが仏の恵みである、仏の喚声であると、かくまでに法然上人をばひとえに信ぜられたのが親鸞聖人である。このようにひとえに法然上人を信ぜられるには、そもそも所由がある。

親鸞聖人は九歳の春出家し給うて、種々に修行し種々に研究して仏道を求められたが、十九歳の時に「命根は僅かに十年」であると思ひ一層切に求め給うた。二十九歳の時

此の様な優勝の念仏であるから、釈尊もこの念仏をば殊に将来の尊師たる弥勒（みろく）菩薩に付属せられたことを掲げてある。第八章以下は、觀無量經、阿弥陀經によつて、釈尊の本意も、十方諸仏の本意も皆この念仏にあることを論定して、念仏の一門のみ縦に古今にわたり、横に十方に通じて人生救済の道であることを示されたのが、選択集一部である。

しかも其念仏を云うにも、ひとえに善導一師による。何故なれば大師は直接に弥陀仏から念仏を授かつたのであるから、独りこの大師に依るのであると云うていられる。ここが信仰問題において極めて大切な点である。此の様に弥陀の本願の念仏一つに依るが故に、又善導一師に依るとまで云ひ放つて、最も極端に一仏名号の信仰を明快に喝説せられたのが法然上人である。

此の如くならねば信仰ではない。たとえ仏の恵みがあり難いというて居ても、これだけは自分がやらねばならぬ、

いよいよ死は眼前に迫っているが、胸中ますます不安、二十年來聖道を辿り、しかも何一つ得るところなく、最後に六角堂に参籠しての挙句、聖覺法印に遇ひ法然上人のことを聞かれ、吉水の禪房に詣で、六十九歳の法然上人から求道の実験を聞いて、たちどころに安心せられたのである。

この時、法然上人は南無阿弥陀仏、即ち選択本願の念仏が正しく往生の道であると云うの他は無かつたに違ひない。

後の時に及んで法然上人より自著の選択本願念仏集を親鸞聖人に付属せられたときの事実を教行信証の大尾に記して「元久乙丑の歳、恩恵を蒙りて選択を書き、同じき年初夏中旬第四日に、選択本願念仏集の内題の字、ならびに南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本（ねんぶつをもととなす）と、釈の綽空の字とを（源）空の真筆を以て之を書かしめたまひき」と。

是等の事実を以て推測するに、親鸞聖人多年の間、道を求めて得られず、非常に苦しんで胸中一点の光なき、真に無明の深夜に沈みつゝあつたところに、この如来の本願南無阿弥陀仏の広大なる仏陀哀々の慈悲を聞きて、言下に暗、実に如来の本願はあり難いと、心身に徹底して、速に律法主義の諸行、即ち聖道門をすてて、かっきりと念仏の信仰に入られた。その態度が非常に著しく鮮やかであつたに違ひない。其時、法然上人より綽空という名を賜つた

のは、このことを証明して居る。

選択集の第一章に引いてある如く、断然聖道門を捨てて浄土念仏の一門に歸入せられた道緯禪師の態度と、法然上人が従来の仏教をすてて念仏一様に就かれた態度と全く一致したる信仰なるとの意味から道緯の緯の字と法然上人の諱（いみな）の源空の空の字とを以て親鸞聖人に名づけられたのである。

このように聖人はひとえに法然上人の教のみが眼中にあつて、其他は何にも無い。若し律法主義を以て選択集を読むときは、念仏は称えねばならぬということにおちいる。念仏を律法的に取るものは順彼仏願（かのぶつがんにじゅんず）の文は見れども見えずの風情である。

法然上人が力を尽して念仏より外に自己の力は一切駄目であると、明快に仏陀の恵みを知らされたお言葉を耳にしなが、上人は念仏を唱えて居られる、我々も称える力で助かるのであると思ひ取つたならば、同時に仏願力が裏面に廻つて隠れてしまふ。念仏して往生するというのと、念仏した力で往生するというのと、僅かの相違であるようだが、その実は非常なる相違である。たとえば親の命に従うて親の恩を喜ぶと、親の命令のままに仿くから親が種々と恵んで下さるのだというのと、まことに機微の間ではあるが、心に親の恵みを頂いて喜ぶのと、自分の仿きから親

の恵みをかれこれと計らうとは、雲泥の相違である如くである、

一筋に仏陀の恩恵を喜んで念仏する実験の味わいを親しくねんごろに教えられても、自分にこの信仰の実験の味わいが無いならば、空しく教語の末に拘泥（こうでい）して、律法主義におちいつてしまふ。法然上人の一向専修の念仏の教を親しく聞いたものが、矢張り美事な独り立ちの念仏でなくて、なお諸行を捨てかねてかえつて念仏に助（す）けさせて居るもののあるのは、皆この信仰の味が無いからである。親が道楽をしてはならぬというから道楽をせぬのだというて居るならばまだそれは頗る危険である。真に親の恵みが思われる時は道楽をせぬなどという如き余地のある云い方でなくして、如何にしても道楽が出来ぬのでなければならぬ。同様に念仏を主にしても、若しその念仏が真に仏の恵みを喜ぶ念仏でないならば一たび捨てた諸行が再び復活して来る。それでは選択本願の念仏ではない。法然上人の念仏は一筋に仏の恵みを喜ぶ選択本願の念仏である、仏の本願と別でない選択本願そのまま念仏である。この仏願のままの教を全く信じ全く受けられたのが親鸞聖人である。

そもそも此人生の上に下る大なる救済が即ち仏である。その仏力を認めずに、唯この仏をたよりたり怠りたりする

自分の手元に力を入れてある念仏ならばとても安心が無い。向うからの喚（よ）び声に順い、向うからの恵みを受けるばかりで安心が出来るのである。それであるから親鸞聖人は、南無という文字、我々の方から与ることを意味するこの文字をば、仏陀の手元に引き上げて

帰命（南無）とは本願招喚の勅命なり

と云うてしまわれた。親の方から自分の名を名乗りて、我をたのめ、我に來たれと云う喚声が南無の二字であると本来の文字の意味を転換して示された点が、信仰問題の要処である。常に云うように、我々が求めることによつて来る信仰でない。仏の恵みが常に我々に向つてあるが、それが我々の心に入り來たつて、初めて仏の恵みの広大なことを喜ぶのが信仰である。その信仰の叫びが念仏である。

これによつて念仏は全く如来の招喚に應ずる声である。法然上人の毎日幾万の念仏はこの念仏である。親鸞聖人の「善き人の教」と云わるる念仏はこの念仏である。この念仏は全く本願である、仏陀それ自身である。南無阿彌陀仏である。この南無阿彌陀仏の本願を説くべく十方世界に現われ給うが、十方恒河沙数の仏陀で釈尊も此十方諸仏中の一つである。釈尊は人生の上に絶対無限の顯れ來つたので皆南無阿彌陀仏である。法然上人は大勢至菩薩の化身であり、聖德太子は又觀世音菩薩の垂迹（すいじゃく）であり

ことごとく皆、我々を如来の本願に導くべく現われ給える権化（ごんけ）の人である。人生の上に現われたるすべての教も、一切の善知識も、皆南無阿彌陀仏以外のものなしと云うことになる。

教行信証の行巻は、一仏の名号を讃歎するのであるが、そこに十方諸仏の名号までおさめてある。なおその上に浄土門以外の諸宗の祖師の念仏まで悉く掲げ來つて、これを結ぶに選択集の「夫れ速に生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門をさしおきて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲わば正雜二行の中に、しばらく諸々の難行をなげすめて選んで正行に歸すべし。正助二業の中になお助業を傍にして選んで正定を専らにすべし、正定の業とは即ちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず往生を得、仏の本願に依るが故に」とある文を以てしてある。

その故は唯一の南無阿彌陀仏、絶対の力の中には何もかも包含して残るところなしという勢である、これ親鸞聖人が法然上人に遇うて喜び給うた南無阿彌陀仏の意義である。この南無阿彌陀仏は勅命である。そこで聖人は、徳号の慈父と呼ばれている。しかして同じ仏の光を光明の母というてある。光明は母なり、名号は父なりという云い方である。これは聖人の信仰の実験の味わいである。南無阿彌陀仏は親の名である、親の恵みはどうして知れたかという

に、仏の恵みの光が心に届いた時に、父の名の南無阿弥陀
仏がとどいて、我々に信仰を起こさせて下さった。

法然上人の説かれた南無阿弥陀仏は七百年前のものでな
い、現に我々の上に仿いて下されてある南無阿弥陀仏であ
る。法然上人は善導大師の疏文を見て、弥陀の本願を発見
したのである。発見して示されたのであって、仏力そのも
のは千古我々の上に向ってある。その南無阿弥陀仏は永劫
の恵みである。その南無阿弥陀仏の内容が無ければならぬ。
名あれば実あり、実に伴う義がある、名に伴う親の慈
悲である。親が子に対して如何にしても捨てぬという願力
である。

南無阿弥陀仏は慈悲の父親の喚び声、義は光明の母の恵
みである。母の恵みが届くと同時に親の名、親の恩が知れ
てくる。私は永い間、名号・本願・念仏という名辞は聞い
て居ったが、その実の味わいが分らぬ。半年以上苦しんだ
最後、心中に仏の恵みの届いた時に、人生に真の大なる恵
みの親は仏陀なりと信知した。その仏陀は此方から求めて
来たのでなく、我は親なりという親の念力から頭われ
来たった名前である。

私は諸方へ参って聖人の事を尋ねて種々の事蹟を聞き種
々のものを見せて貰うが、その中に光明本というのがある
これは盛岡の本誓寺にある。先ず中央に南無不可思議光仏

と大書し、右方の少しく下ったところに帰命尽十方無碍光

如来と、釈迦牟尼仏の尊像とを現わし、左の方には之に対
せしめて、南無阿弥陀仏と弥陀の尊像とを書し、左辺には
下より上に漸次に龍樹菩薩・天親菩薩・大勢至菩薩・曇鸞
和尚・慈愍三蔵・善導和尚・道綽禪師・少康禪師・法照禪
師を囲画し、右辺には大勢至菩薩と相對する位置に聖徳太
子を画く。これ觀世音菩薩の垂迹を示し給うのであろう。

その周囲に太子の眷属とも云うべき五徳博士・阿佐太子・
慈恵法師・日羅上人・蘇我大臣・妹子大臣を画き、上方に
は一団藥(だんらん)を作りて、法然上人・釈聖覺・釈親
鸞・釈真仏・釈性信・釈是心を画き給い、この上下二図の
中間の少しく右傍に偏するところ源信和尚を画いてある。

而して中央の南無不可思議光仏の文字から大光明を放たし
て全大幅を覆うてある。これ十字、六字の名号も、釈迦弥
陀の二尊も三朝浄土の大師達も、其他天地法界、皆光明中
の示現であることを表示されるもので、全く聖人の信念を
図画せるものである。聖人の心中に如何に如来の大慈を味
われたかがこれで解ると思うて喜んで居った。而して南
無不可思議光仏と文字で頭わしてあるから、光明名号の名
義が揃うていて不足がないと思うて居った。

然るに本年越中西岩瀬村の浄光寺で初めて名号本を拜す
ることが出来た。これはまた中央に南無阿弥陀仏と大書し

これを覆うに、天蓋を以てし、これを戴すに宝蓮を以てし
左右にまた南無阿弥陀仏を稍小さく重ねて二つ書し、その
外方に更にまた南無阿弥陀仏を四重に小書してある。これ
は恐らく十二光を表示されたものであろう。宝蓮の下方に
大勢至菩薩、天親菩薩の形像を図画してある。これは彼の
光明本の対であって、この二本を以て光明名号 摂化十方
の大慈悲を渴仰し給える親鸞聖人の実験の味が、遺憾なく
頭わしてあるので、信界父母の図である。行巻に

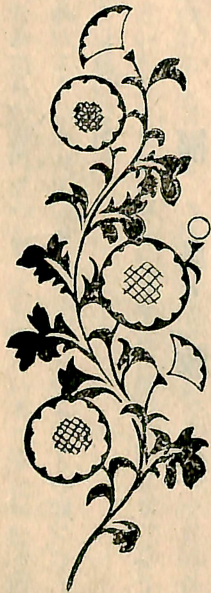
まことに知りぬ、徳号の慈父まします能生(のうこ
よう)の因縁(か)けなん、光明の悲母まします所
生(しよしよう)の縁そむきなん、能所の因縁和合すべ
しといえども、信心の業識に非ずば光明土に到ることな
し。真実の業識これ内因となす内外因縁和合して報土の
真身を得証す。

と云われてある。仏陀光明の照耀によりて漸くに尊かれて
信仰の門に入るが、いよいよ信仰に入りて後は、また光明
の照耀によりて信仰が動転することなく、始終一貫して極
楽無為涅槃界に往生する。恰も子が父母によって生れ、更
にまた父母の愛護によって生育するのと同じである。浅草
報恩寺所蔵の聖人真筆の教行信証を拜すると、この光明名
号の因縁のところに沢山に雌黄を点じて大いに注意を与え
てある。これ実に聖人の実験の信仰の要処である為である

末灯鈔にも名号は如来の大善大行にして之を我等に与え
たまう約束が本願である、そしてその名号と光明とは能所
因縁(のうしよしんねん)の父母であると示されている。

宝号経にのたまわく、弥陀の本願は行にあらず、善にあ
らず、ただ仏名をたもつなり、名号はこれ善なり行なり
行というは善をするについて云う言葉なり、本願はもと
より仏の御約束とこころえぬるには善にあらず行にあら
ざるなり、かかるが故に他力と申すなり、本願の名号は
能生の因なり、能生の因というは即ちこれ父なり、大悲
の光明はこれ所生の縁なり、所生の縁というはすなわち
これ母なり。

(親鸞聖人の信仰)



仙教と私

信仰の目覺め

求道の中心という題にして仏教と私との関係を述べる。

これは、私自身と親鸞聖人との関係というか、聖人のみ教えを私が、いつからどんなにして聞くようになったか、そのことから述べはじめて、なるべく理におちないようにして述べてみたいと思う。

私が親鸞聖人のみ教えに眼が醒め始めたのが、二十六歳の夏である。今（昭和四十年）から五十年前のことになる。どうしてこういう縁が開けたかという点、その頃私自身、今考えてみると、まあ若気の至りで、はなはだお恥しいことであるけれども、結婚問題で悩んでいた。それも自分の親に対して隔て心をもったりして悩んでいた。その時に、東京の求道学会というのがあって、近角常観先生がずっとこの学会において、信仰上のお話をなさっておられた。その近角先生のお話によって導かれて親鸞聖人のみ教えへの眼が開けはじめたというわけである。

それは、二十六歳の夏であるけれども、お話を聞き始めたのは、その歳の二月二十二日、この日は聖徳太子のご命日になるが、その時に私の叔母にあたるものを案内して、そして学舎に聞きにいった、というのがそもその始めである、叔母は熱心に聞くつもりで参ったけれども、三時間ばかりの熱烈なお話を聞いて、あまり感じなかったようである。

私は実に、そのお話を聞くつもりはなく已むを得ず叔母の後にについて学舎に参った。その私が、かえってその時のお話にひどく感激して、それから日曜日曜にあったから、いつもお話を聞きに参るといふことになり、その七月のはじめに今の求道学舎で、全国から熱心に集まって来られていたところの、求道者の集まりで、先生が親鸞聖人の『教行信証』の「信の巻」のあの阿闍世王の入信の文というあそこを主にして毎日一週間、また特別熱心なお話があつ

た。そのお話を聞いているうちに、私の胸に五つも六つもあつたように思っていた苦しみの塊りが、次第次第になくなって、そしてその七月十一日の夕方、私自身下宿に帰ってくる途中から自分の心持は変わったと感じた。下宿の部屋におちついてみるというのと、それまでは、私という人間はお念仏というようなことは軽蔑していた。その私が、自然と念仏称名せずにいられぬということになってきた。それが親鸞聖人のみ教えに私の眼の開けはじめ、心の開けはじめなのである。

その時に一週間ばかり、何というか、法悦状態というか何ともいえない、いい心持で過ごしたのである。

それからち二十八年という長い間、近角先生が昭和十六年の十二月の初めにおかれになるその時まで、ずっとこの教えを受けたものである。私にとって 第一の善知識は近角先生である。それで近角先生のことから述べてみたいと思う。

先生はまたどうして親鸞聖人の信仰に心がおひらけになつたかというのを、いろいろ先生から伺つたことがある。ご本を読んだりして、私の知っている限りでは、先生は近江の琵琶湖の北で、ごくこの淋しい村の小さな大谷派のお寺の出身である。そして先生のお父さまは大変偉いお

方であつたようだ。非常に厳しく先生をお育てになつた、
そして先生の信仰そのものをお父さまが導いてお聞きにな
つたようなものであり、それを先生ご自身のお話でも、お
書きになつたものでも、私は承っている。また、なんでも
九ツの歳とかに、お父さまからはじめてあの「姥捨山」の
お話をお聞きになつたそうだ。

① 広解花によればやノ男有

② 姥捨山の話といえはご存じの通り、親不孝の息子が、年

寄つた自分の母親を、奥山に捨てにゆく話であり、その道々で母親は道端の木の枝を折ったり草の葉を結んだりしてしきりに道しるべの枝折りをこしらえている。息子の方では、このおふくろは、こんなことをして目印しをこしらえて、また帰ってくるつもりかしらと思ひながら、奥山へつれてゆく、いよいよ山の奥の奥につれていって、その草の上に母親をおろし、息子が母親に申しわたすようにいう。「お母さん、たいていわかつていたでしょう。今日はこの奥山に捨てに來た。お母さんは歳をとつて、もう何も出来なくなつてゐる。食うことばかりやたらに食うけれど、もう何の役にも立たない。氣の毒だけれど、ここへ捨てに來た」というようなことを申し渡すような調子でいう。そうすると母親の方は、

「それはよくわかっていました。自分がもうこの歳になつて何もお前らの役に立つことは出来ないようになった。捨

てられるのは当たり前だと思ふ。で、お前はこれからさきまだ長いことであるから、十分にたっしやで氣をつけて暮しなさい。お前が帰ってゆく途中、もしや、道に迷うことがありはしないかと思つたから、道しるべの枝折りをこしらえておいた、あれをたよりに、道に迷わないように帰ってゆきなさい」

この一言が、この親不孝の息子、の腸の底まで沁み込んで、息子がその場に倒れる。本当に自分は親不孝であつた、という事に眼が醒めてくる。それから改めて、母親を背負つて家に帰り、すっかり親に対しての態度が改まつてくるという話であるが、これを、九ツの時に父さまからお聞きになった。

ところが、先生がこの親鸞聖人の信仰にお心が開けてきたのが、たしか三十歳くらいの時であつたということだが、このご信心が開けてくるというと、この九ツの歳に父さまからお聞きになったところの姥捨山のお話というのが、ご信仰の心持をお話なさる上の譬話として、非常にしっくりなされたものだと見えて、私なども先生の話を、どれだけ聞いたか、非常にたびたび聞いているが、お話を聞くとたび毎に、お話の中に必ず一度はその姥捨山のお話が出たものであつた。

お参りをして先生のお顔をみながら、今日もあのお話

始終聞いていたのであるから、先生はそんなに人前で話できないお方だったのかと思ひ、不思議に思つたのであるが、先生はそれにおっしゃつた。してみると、先生はこの親鸞聖人のみ教えの信仰の道でお心が開けて以後、そういう点において非常に積極的になつた、そういうことが、うかがわれるのである。

仏教というものは消極的な教えであると、今の青年の方々は仏教なんか聞くものか、あんな陰気な抹香臭い話はまっぴらご免だというような調子かと思ふ。が、そんなことは私自身がそうなのであつて、私二十歳前後に日蓮上人に少し熱心になつて、日蓮上人のご遺文をあちらこちら読んでいた。日蓮宗の信者とまではいかなかったけれども、とにかく日蓮上人に熱心になつてゐた。その頃にも日蓮上人の口真似をして念仏無間というようなことを唱えたりしたわけではないが、しかし、念仏というものは白髪のお爺さんやお婆さんが、もう片足を棺槽にふみこんだ、そういう人には適當であるが、自分のように新しい時代の教育をうけて、こんなに若いものにお念仏なんか何の用もないというような心持で、えらくこのお念仏を輕蔑してゐた、それが今の近角先生のご縁で、すっかりこう改まつてしまつたのである。

そして、私自身がそれでは近角先生のように大いに積極

であるかと思つて聞いていると、果してお話ができるというやうなことで、私もこのお話はなんど聞いたかおぼえていないが、非常にたびたび同じ話を聞いている。けれども、同じお話であるけれども、いつ聞いても非常にありがたかつたのである。

消極的と積極的

そういう風なことで、姥捨山の話ということと近角先生とが結びついている。その近角先生は実は非常な親孝行のお方であつて、アメリカからヨーロッパへ留学になつたその時には、最後にイタリヤの宿であつたか、そこで急に両親の慈愛という事に思いついて、もういても立つてもたまらぬやうになり、それでもう日本へ帰ろうということとて、お帰りになつたということであるが、お帰りになる時お家に電報を打たれると、ご両親がその電報を、自分がさきに見よう、自分がさきに読もうとて、うばい合うやうにして、ご覧になつたこともあつたやうである。そんなことで、先生は親ということが非常に深く心に沁みていられた。

その先生のお話を聞きつづけたのであるが、私が意外に思つたことは、先生ご自身、自分がかつともと内氣であつて他人の前で大びらに話すことなんかできない人間だつたとおっしゃつたことがある。私は、先生の熱烈なるご講話を

的になつたか。そうはいえないので私自身はやはり私自身の性格しか持たせがないから、きつと近角先生からご覧になつては、この福島というの、どうもなまぬるくていけないとお考へになつたにちがいないのである。けれどもしかし先生にくらべると、それこそ万分の一か千分の一かなまぬるいんだけれども、しかしやっぱりこの親鸞聖人のお教えに心が開け始めてから、私のいわゆる生活態度というものも、少しずつ變つてきた、ということをお自分では感じてゐるのである。

生活態度が變つた、自分が立派なものになつたという意味ではない。一向立派なものにはならないけれども、生活態度は改まつた、そして多少積極味があらわれてきた。その後に親鸞聖人の関係のものを拝読するばかりでなく、聖人が非常にご精読になつたという華嚴經、その中の入法界品にでてくる善財童子の求道物語などをかじりかじり読むやうになつてから、この求道ということの積極性を大いに感ずるというやうな事になつた。私自身がこれまた善財童子のやうな求道はできてはいないけれども、善財童子の求道そのものが、私にある刺戟を与えている。今日までも刺戟を与えているということは確かである。

できうるならば、善財童子のやうに、この世のあらゆる人々のみならず、天地自然そのものといへども、自分のた

めの善知識としてそこから教えを受けていきたいという、その心持はもっている。とにかく近角先生は非常にこの積極的のお心持ちで法をお説きになった。

それにさらに感じることは、この近角先生は、もと非常に政治的天分の豊かなお方であったのである。もしも政界で活動なさったならば、相当な活動をされたに違いないと思うのであるが、先生はそのお心が開けて以後、絶対に政界に入るといふようなことをお止めになったばかりでなく、ただ一筋に親鸞聖人の信仰を説くということを、ご自分の一生涯の仕事となさって、それでもって一生涯貫き通された。

身心の煩悶

先生の求道の始めは、ずいぶんひどい煩悶をなさったようであった。なんでも仙台の松島で講習会があつて、そこへでかけていき、非常に心が苦しくなり、それで帰つてこられてから何ともいえない苦しさでたまらない。足をつま立てながら一室のうちをくるくると回つておいでになつた。そのうちに、なにかひどい病氣になられたそうである。

ご病氣は私にはわからないけれども、ルチュウとかいてある。全身の筋肉がいたむというようなご病氣だったそうである。それをお父様の決断で手術をお受けになつたとい

自覚するようになったということである。その心持ちが一生涯つづくのである。

もう私どもが、そのお話を聞いて心に沁みていることは、今の姥捨山のお話の如くに、われわれは何ともいえない親不孝者と同じである。その親不孝者が、仏様をそっちのけにして、いたずらばかりやっているところの自分をあくまで見捨てないで、どこどこまでも、そういうありさまであるから、可愛想で捨てるに捨てられぬ、捨てない限りはあくまでも汝にこの真実心を注いでゆくという仏のまことである。仏のまことを自分のこの生命の中心に注がれているのであるというところから、そこに念仏が起るというお話である。

非常に熱のある、徹底的なお話なのである。それを私は前後二十八年間その同じお話を始終うかがいながら私がお育てをうけてきたわけである。

——続く——

× × × × × × × ×

波岡茂輝氏 詠藻

野中なる観音堂の墓原に 彼岸の日とて香けぶりけり

大方の古き墓は今日の日にも忘れけんか荒るるままにて

う事である。その煩悶の最中、非常に友だちというものを求めておられる。また、非常に親しいお友達があつて、煩悶の中心問題は、自分には隔て心がやまない、しかし本当に打融けるところの友達が欲しいというようなことで、ひどく苦しみなさったということである。そしてそれが親しい友達には感じられたもので、はるかに隔つたところにおられた友達が、なんともいえない夢をみられたというようなこともあるそうである。

そのようにして、本当の友達が得られればよいという事で苦しみつづけておいでになる。そして身の病氣になつて結局手術をうけ、それから病院に通われるようになり、病院からの帰り道その人力車の上に乗っていて、途中でふっと心が開けてきたということである。そしてまあなんとはいえない心持ち、つまりかねてのお父さまの教えがその時はじめて徹して、お心が開けてきて、そして自分がこういう風に、本当の友達を求めて得られず、苦しみ苦しんで、誰もこの自分の心の内を察してくれないものと苦しんでいる自分を、その自分のそういう苦しみがあつたゆえに、そういう苦しみをもっているから、見捨ててに捨てられぬ、見捨てない限りは、あくまでも汝に同情して無限の同情をお前にそそぐという、そういう仏様のお慈悲というのがこの時から始めて、自分の身に徹したということ

と初め

ふるさとの親のみ墓は荒れにけむさかりて住めば心にまかせず

妻よ子よ わが墓にこころ悩ますな 次の代には知る人なけんを

人の世にうめ草のごと生きて来し 我が身をしめど今はすべなき

残る齒の今朝また一つかけにけり掌にのせ見ればさびしも
順も逆も唯一時の夢なりき つぎつぎ人の死ぬるを見れば
名もあげず財もためず六十の齢を重ね今日を生きたり

おのづから心はうちにかへりけり世とほどほどに絶ちてしをれば



池山先生のことども

都崎雅之助

私が池山先生に初めてお目にかかったのは、たしか大正四年（一九一五）でありましたからもう六十年近い昔の事です。当時、先生は岡山の第六高等学校のドイツ語の教授をしておられ、私は理科に在学していた。しかし、私達の組の独乙語の担任は池山先生ではなかったので教室で先生にお目にかかることはありませんでした。

それがどういう御催しであったか、多分、仏教青年会の連中につれられてと思いますが、先生のお宅へ伺うようになりしました。それ以来、何度もお宅の方へ御邪魔したり、学校内で行われた仏青に参加して先生の身辺に接し、しだいにその御人格に強く引きつけられるようになった。といって、仏教の教理について深くお尋ねする素養も熱心さもなかったのだ、唯友達についてもっぱらお話を聞くのみでありました。それでも、それらのお話の数々とお話振りが、今日もはっきりと記憶に残っております。その二三を誌して見ましょう。

池山先生を思い出す時、一番に頭に浮かぶのは、歎異抄のことと、そのドイツ語訳のことであります。まず私に、歎異抄のことと、それが極めて重要な信仰の書であることを教えて頂いたの先生でした。

好都合にも、丁度その頃、先生は歎異抄のドイツ語への訳訳を企てておられ、学生達に「御一緒に訳しましょう」といわれていました。これは私にとって歎異抄の誤りのない解釈のてだてとなると同時に、先生から浄土真宗の真義を教えて頂く最もよい機会でありました。

ある時、先生は「往生」という言葉はドイツ語にはありませんので、私は逐語訳的にヒンゲブルトと云う言葉を作ってみました。そしてこれがドイツ人に通ずるかどうかを同僚のフェラー先生に問い合せてみましたところ、それで十分意味が通ずるとの御返事でしたから、この言葉を使

いましょうというお話がありました。

これは一例に過ぎませんが、仏教用語を文化の系統の違うドイツ語に翻訳することは大変な仕事であります。しかし、先生は歎異抄全部を僅かの日月の間に完了されたことをその序文に書いておられます。私は、こうして歎異抄を一通り読み終わる機会を得たことは、後から考えて私の高校生活中に得た重要な収穫でありました。

御承知のように歎異抄は、たとえば大きな梵鐘のようなもので、読む人の力に応じて法味がひき出せるものでありますから、最初歎異抄を読んで感じたことは、その後しだいに修整されて来ております。そして現在感ずる事は、その文意の深さに驚歎しているという事に尽きます。

先生の独訳歎異抄は、ドイツ語のわかる人達の間では日本語の原文より分かり易いと、仲々評判がよかったので、私は昭和八年鉄道省の在外研究員としてドイツに滞在することになった折、先生の独訳歎異抄を携行しまして、知り合ったドイツの友人や当時ベルリン郊外フローナウにあったドイツ人ダールケの仏寺に居られた榊原順次師を通じて仏教に興味を持つドイツ人仲間にも見せました所、よく分かるといっていました。とに角、この本は池山先生思い出の大切な本であります。

先生は独訳歎異抄に続いて大正九年一月には意訳歎異抄

を刊行されました。これは、前述の独訳歎異抄を御覧になった東本願寺の大谷連枝から、この独訳から日本語訳を作ったというお話を聞かれて、分り易い現代語で新たに書き下ろされたのでありました。

(二)

池山先生の言行は、いずれも懐しいものでありますが、その中でも青年の心にヒヤリとした感激を与えたのは、先生が奥様から突然痛をうちあけられて、その驚きと悲しみを越えられた御話でした。当時御長男の寿夫様は六高在学中、その下に何人ものお子様をかかえておられたので、奥様にしても先生にしても、人生で最も悲しみの絶頂に立たれた時でした。ある夜の集会で先生は、言葉少なに奥様の病氣について語られ、非常に驚嘆はしましたが、これから数ヶ月の間、奥様と信仰について真剣に話し合えることになったと話されたのでした。

仏の教を頭の中だけでうけとっていた私は、日々の生活の根底に仏教がなければならぬ事を教えられたのでありました。

(三)

大正七年夏、私は岡山を去って九月東京帝国大学工学部

へ進むことになりました。そこで、先生にお別れに伺いました所、東京では、東大前の求道会館におられる近角先生に御化導をうけるようにと教えられました。

池山先生に関する思い出は、高等学校時代だけではありませんから、そう多いとはいえないと思いますが、私の念仏生活の種をまき、育てて下さった影響は大きいと思います。池山先生にお別れしてからは、その後の先生の御著書、「仏と人」「絶対他力と体験」あるいは「信を行く旅人」などを讀ませて頂いて、先生の温顔と和言を偲びながら、御教化を頂戴するのであります。そしてその中のどこかに、丁度私が六高在学時代の先生の御記録中に「今晚は學生が来ますので」と訪客と対話されているのを見まして、先生に何かと御世話になった事を今更ありがたく思い起こすことです。

私は後半生を、大学教授または大学の管理者として生活しておりますだけに、本当の教師とは何かについて考えるたびに、池山先生を追想思慕することでありました。

(昭和四十九年七月中盆の日)



金言集
無住国師 (砂石集)
宗旨の形のとのえるときは、すでにその本質を失われ
たるときである。

行 誠上人
宗旨、伽藍は、人のつくるところ。強いて護持せんとす
れば、かえって法のいのちを失う。

法然上人臨末の言葉
光明あまねく十方の世界を照らして、
念仏の衆生を摂め取って捨てたまわず

源信僧都の常持語

彼の仏、今現に世に在って、成仏したまう
衆生称念すれば、必ず往生を得るなり。
と誦されて、「衆生称念」とあれば、我もその中にあり
と感涙したまう。

良寛師の辞世

かたみとて何かのこさむ春は花

夏ほととぎす 秋はもみぢば

池山栄吉先生を憶う

東 昇

もし死んだら——あれやこれやを思えば名残りはつきないが、ままよ「俺にはただ念仏がある」。

病床の傍、見やすいところに、近角常観師筆の謹録聖訓とある軸がかかっている。

乗大悲願船 浮光明広海 至徳風静 衆禍波転
即破無明闇 速到無量光明土 証大般涅槃 云々

「即ち無明の闇を破して速かに無量光明土に到る」が特に目をひく。

以上は先生の「たゞ念仏」のなかの一節です。この一文は、昭和十年十二月八日、洛西蓮華谷の先生宅で、直接先生よりいただいたものです。『聖鸞寮誌』第四号、昭和十年十二月発行、(編集兼発行人、筆者)に掲載されています。

同誌の中の「寮の日誌」の欄に、私は次のように書いています。(この頃、私は聖鸞寮を主宰していました)

十二月八日
午前中、稲津紀三師の『教行信証』の講義あり。
午後、寮生そろって池山先生を訪問す。御病後にもかかわらず、先生は吾等の寮誌のために「たゞ念仏」と題されてお書き下さった。この日、先生は応接間で、寮生を前にして原稿を読まれたうえで私に渡された。しばらく先生のお話を承って辞去す。一同感激。先生宅へ何度おじやまさせていただいても、すっかりうたれて帰る。
同年十一月二日の日記にはこうあります。
夜七時より、顕道会館にて一年ぶりに池山先生の「恋し故郷」と題された御講演あり。会場立錫の余地なし。全快とまではいかれない御体をもって立たれた先生の聖容、久しぶりに接し得たあの温容！満場声なく、死線を超えての一言また一言、吾等の肺腑をつく。

オネガヒダカラ スゲキテオクレヨ
一心 正念 直 来

と叫ばれて降壇された。

×××××

「たゞ念仏」のなかの先生のおことばをいただきます。

今、死ぬという失先に、長々しい文句や、こみ入った筋道が分らなくてはいけない、というのでは、間に合わない。これだけは心得おくべし、など条件つきではやりきれない。「ただ念仏」のひとつに、をさまればこそ、ほんに「たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」である。

その「たゞ念仏」がぼっかり頭に浮かぶ。

それがそのまま「如来廻向の念仏」ではないか。

それがそのまま「行者のためには非行非善」としての念仏ではないか

それがそのまま「念仏まうさんとおもいたつこころ」ではないか。

そしてこのこころこそ、信的生活の始中終（しちゅういゆう）を貫く常住不壊の生命であるのだ。

「たゞ念仏」から連想してか『御文』で聞きなれた「ただ白骨のみぞのこれり」という句に想到する。その語呂に合わせて「たゞ念仏のみぞのこれり」とくちずさむ。信ある人の臨終の、ある刹那には、あってもいい美望に値する

れましたが、私は大谷大学の校門の前を通るとき、おのずから頭が下がるのです。なぜか合掌したい気持ちがわいてまわります。

講演の後、松原学長はじめ、学長室にお集りの文学部長、図書館長、学生部長、こもごも池山先生のことを話されました。私にとりまして全くの感激でありました。

先生は今も多くの人々の心の中に生きておられます。先生は、年とともに、私にとりだんだん大きい存在になってゆきます。先生は偉いな！先生は偉らかったなあ！

慈光社から、池山先生三十七回忌のことを知らされ、求めに応じ一文を草した次第です。

追記

小生おかげ様で元気にしています。

友人医師の保証つきで、今夏は七月ロンドン、八月末にはオーストラリヤへ講演にでかけます。

福本慶子さんは京大病院に入院中ですが明日手術ですが大丈夫とのことです。

昭和四十九年五月二十九日



転回だ。「たゞ念仏のみぞのこれり」さて、その次くるものは「速に無量光明土に到る」の大団円だ。

池山先生は、御臨終の際、このことを実証されました。「何も残るものはない、何も残るものはない、たゞ念仏だけが残ってくれる、ただ念仏だけが残ってくる。偉いことだよ、有り難いことだよ」

先生の最後のおことばでありました。

私は昨年春、大病でたおれ、九死に一生を得ました。吾が六十年の全生涯の総決算は何であつたか。それは「たゞ念仏」でありました。身についてはなれないもの、それは南無阿弥陀仏ひとつでありました。それにつけても先生の鴻恩をしきりに憶うこの頃であります。

先般、比叡山延暦寺の葉上照澄師とのテレビ対談の時のことです。対談中、葉上師は旧制才大高等学校生徒として池山先生に接しておられたことを話されて私をびっくりさせました。

本年五月一日、私は大谷大学の松原祐善学長の御依頼をうけ、同大学の新入学生に講演させていただきました。吾が生涯の師、池山先生は同大学で最後の教授生活を閉じら

山村慕鳥詩抄

西瓜の詩

座敷のまんなかに

西瓜が一つ

畑のつもりで

ころがっている

びんぼうだと云うか

あるとき

また鯛（ひぐらし）の鳴く頃となった

かな かな

かな かな

どこかに いい国があるんだ

ふるさと

涖々（そうそう）として

天の川が流れている

すっかり秋だ

とほく

とほく

豆粒のようなふるさとだなう

挽歌抄

丸亀市 鎌田 晃

池山先生御往生の数日前お病床を見舞ひ、後御往生を聞きて、

尊しや いまはのきはの わが恩師

笑顔たたへし ことを偲べば

病む苦痛 おしやぶりても ひらめける

師の笑顔こそ 尊かりけり

師の病 癒えなんものと 思はれき

笑みをたたえし その面輪見て

にこやかに いつも変らぬ み相を

いまはの際に 示されにけり

百苦身に せまりつれども 笑顔もて

喜びのそと 黙しかたたる

苦しみの なかより今日は 南無仏と

称へられきと 師はのたまへり

み仏の 三十二相も 師の君の

おもかげに先づ 見えそめにけれ

枕頭を かこめる医師の 数々を

押し開きてぞ われを呼ばれける

師の君の いまはのきはの ほほえみは

無量寿会座の 微笑なるらん

そのかみの 釈迦牟尼仏の 微笑をば

いまはのきはの 師にて示さる

百苦身に せまりつる師の ほほえみは

これぞ六種の 震動なるらん

あめつちの 声をひそめて 婆羅雙樹

花 洛北に しづしづとちる

花はふり 妙なる響 聞ゆなり

尊きみあと あとにのこして

わが恩師 逝かれしときに 不思議にも

生きてまします ことを知らさる

幾百の 人の死にめに 会ひつれど

かかる不思議の ためしなかりき

形骸を 百年ここに 止むとも

呼吸ばかりして 過し行くもあり

朝夕に 顔をあはせて 過すとも

別れつつある 人もありけり

身は遠く 海山へたて 暮せども

日に日に会ひて 過す人あり

信仰は 時と処を 超えさする

尊きをしへ 師に知らされき

聖人と 七百年を へだつれど

会はれうるぞと 師はのたまへり

あやまりて 親にかしらを 下げしとき

初めて親に 会はれうるなり

あやまりて 仏にかしらを 下げしとき

初めて仏に 会はれ得るなり

うからやから 日に日に共に 暮せども

わかれわかれの 暮しなるらん

比叡の山 七百とせの むかしより

念仏の風の 吹くぞ尊き

百年を 七たび重ね 来ぬれども

祖師聖人に 会ふぞうれしき

山たかく 風は涼しく 南無仏と

迦陵頻伽の 声ひびくなり

うつし世に 妙なるみ声 聞きつれば

七宝瑠璃の うてな偲ばる

一道や 一つの会だに 偲ばれて

一味のあぢを 教えられけり

みさとしを いまはの際に 垂れ給ふ

深きえにしに 涙こぼるる

(編者註)

故鎌田晃さんは、百年ほど前庄松同行の誕生した法縁の深い土地に育ち、一高東大を卒えて家業の酒造を続けられたが、明治・大正・昭和にかけて篤信の師を悉く訪ねられて求道聞法せられた人である。池山先生の書「心光照護」や「親鸞におきては唯念仏して」を木版刷りにされて有縁の方に頒ち、度々蓮華谷に池山先生を訪うて、随喜していられたが、先生の示寂を聞かれて以上の感懷を述べられて、一週忌の時の追慕録の「呼子鳥」にのせられたものである。

浄土に還えられて久しく、池山先生の三十七回忌に原稿を頂くすべもないので、「呼子鳥」から歌稿をそのまま頂いた次第である。

唯念仏のみぞ残れり

花田正夫

池山先生の御晩年に、腎臓病等の大病された時、御病中に歎異抄の一言一句が深く心にしんで、念仏にはじまり、念仏に終るありがたいお信味を述べられた一番終りのところ「さて一応病が恢復してみると、蓮如上人の白骨の御文になぞらえると、ただ白骨のみぞ残れりで、ただ念仏のみぞのこれり、であった」と結んでいられる。

これについて、先日フト思い出したのが、ビクトールユウゴウ作の『噫無情』（レミゼラブル）の主人公のジャンバルジャンの問題である。これは私自身の問題でもある。そのジャンは貧困な人に同情して盗みを仿いて獄刑をうけたが、度々脱獄しては又投獄されるという始末であった。然し刑期が満ちて世の中に出了たが、何処の食堂や宿屋からも恐れられ嫌悪されて閉め出された。

疲れて公園のベンチに横になって一人の人のよさそうな老婆が近づいて来て「モシモシ旅の人、そんなところ

ろで寝ていると風邪をひきますよ」と呼びかけた。「銭がないので宿にもつけず、腹がへって動けないんだよ」と答えると「それはお気の毒に」といって、なけなしの若干の銭を出して「何かお食べよ」という。彼は、世の奴等が冷たいから、取れるだけ取ってやれと思い「ありがとう」と口では言ったが、ふてぶてしい態度であった。行きかけた老婆がまた帰って来て「あそこに電灯が見えるだろう、あそこに行きなさい、有難い僧上が居られるから」と言った。

彼は、自分の素性を知ったら誰一人として迎えてくれるものか、と思つて聞き流したが、夜は更ける、飢えと寒さが身にしむにつけ、僧上を訪う気になつて、無駄と知りながら、扉を叩いた。すると白髪のミリエル僧上が「何か御用かね」と出てこられた。彼はうつむいたまま「私は旅の者で、宿もなく食もないので難渋しておりますが、馬小屋の隅にでも一夜の宿を借して下さい」とつぶやくように言

うと「それはお気の毒に、サアお入り」と迎えられた。彼は思いもかけぬ親切な言葉にすこしためらつたが「実は私は今日出獄した……」と告白しようとする「此の家は私の家ではありません、主の家です、宿もない食もない人の家です。ここに来る人の過去は一切用事がありません、サアお入り」と手をとつて引き入れられた。

やがて、入浴やら食事など済ませたあとベッドのある一室を与えられた。彼は硬い床の上にはかり長年寝ていたので柔いベッドや奇麗で暖かい布団にくるまったせいか眠れないままに、月光かがやく夜空に見入っているうちに、またしても悪心が起り、銀の皿を盗んで僧院を抜け出した。

然し目ならずして警官に捕えられて僧上の前に連行された時、僧上は、「銀の皿は彼に与えたもので盗んだのではありません」と証言して釈放をたのみ、彼に近よつて「この銀の燭台もあげたのに忘れて行つたね、これも持つて行きなさい」と手渡しながら小声で「真人間になるという約束を忘れないで下さい」と囁いた。

彼はそのまま夢心地で出て行つて、野原で一休みをしていると、子供達が銀貨を高くほうり放げて遊んでいたが、落ちて来たその銀貨を靴の下にかくしてしまった。子供等は泣きながら帰って行つたが、それから大分たつて、始めて我にかえるのである。それから彼はすっかり立ち直

るのであります。或町に行つて工場を始め段々成功し、自分の罪惡を思うて、罪亡ぼしに種々と施しなどし、仕事も正直にやるので財産も人望も得るに及んでマデレン市長とあがめられるようになった。

丁度その頃、獄を破つて逃げたジャンバルジャンが捕まつたということが報道された。実は本当のジャンバルジャンではなかつたけれど、その人は法廷で裁かれ無実な罪をかけられて無期刑をうけることになった。その時彼は非常に考えさせられ、自首せねばとも思う下から、そうすれば名譽も財産も失つて終身刑を受けねばならぬ。こうした二つの問題の間に心がもつれ、思い乱れた末、とうとう自首せずにはいられない深い大きな力に催されて法廷に出で終身刑をうけるのであった。

ところが彼の工場で前に仿いていて罷免させられた女が自分の子供を他所に預けて、養うために髪を切り、歯を抜いて売っているということや、その女がマデレン市長を深く恨んでいるということや、その女は病で段々死が近づいているということを聞いた。そこでまた脱獄してその女の遺児のコーセットを引き取つてバリの貧民窟で隠れて育てようになつた。

それからはコーセットを育てることに打ちこんで、親もなければ子もなく、親戚も自分に好意ある知人もない彼は

コーセットを愛することを唯一の生き甲斐にするようになった。そうこうして年月を送るうちにマリウスという青年とコーセットは恋愛におち、彼に段々と離れて行くコーセットを悲しみ煩悶し続けたが、遂にあきらめて結婚さし、持参金のようなもので与えてしまうのである。

そこで兩人から彼は親のように大切にされるのであるがジャンバルジャンは落着けないで、自分の素性をマリウスに打ち明ける。その結果又段々と疎んじられるという破目になるが、或人からマリウスは革命戦争の時に地下の泥の中で殆んど死に類していたのをジャンバルジャンにたすけられたということを聞いて、マリウスの心もすっかり變つて来はじめたのであった。

一方、彼は何もかも打ち明けて、マリウスからも疎んじられ、もうこの世の中にいて何も頼るものもないという極端な淋しさの底に落ち、いよいよ病も重くなりやがて死がせまった時に、ミリエル僧上から頂いた銀の燭台にロウソクをともし、それに合掌しながらミリエル僧上の想い出を唯一の想い出として死んで行くのである。この世の一切のものはそこにすたつて、ミリエル僧上の心というものが彼の心の中に生きてくる。これはもうこの世を離れた心である、そこに彼が永遠に生きて行く一筋の道が開けたのである。

聞かせ頂いていた佛のおまこと一つがよるべであつた」とお念佛にかえられ、懇意な弁護士さんに立合つて貰つて、次男の勘当も禁治産も解消して、家族に集まつて貰い

「自分は家の復興ということばかりにかりはてて、家族の一人一人の幸福を皆踏みにじつて本当に申しわけのないことをした。これからは皆んなで相談してすべてを処理して下さい。

自分は日ならずして死なねばならぬが、今にしてはじめて、財産も名誉も、何もかも本当の頼りになるものはない。唯一つお念佛だけが力であり光りである。自分の亡きあと、どうかお念佛を大切に聞いてくれるように」と遺言して、ほどなく念佛合掌のまま浄土へ還えられたのであった。

私にはこのN氏のことを聞いて、聖徳太子がお家庭にあつて常に「世間は虚仮なり、唯佛のみ是れ真なり」と言い続けていられたことを思う。又、歎異抄末文の「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておわします」との親鸞聖人の御述懐を連想する。

但し、世間のことは皆つまらぬ、佛だけがまことであるというように虚仮とならんで真実があるというのではな

以上は、レミゼラブルの大略であるが、ここに随分前、と言っても終戦後に亡くなられたN氏の生涯は、身をもつて教えられることが多いので書き添えよう。N氏はジャンバルジャンとは違つて精進努力型の律法主義者であつた。大学を卒えると一流の大銀行に就職し、一途に我家の再興を願つて専心努力された。その甲斐があつて信用も出来畜財もゆとりが出来たので食品会社を設立し、一応業成り名を遂げられた。ところが戦争は段々拡大し、大学を卒えたばかりの長男が上海の上陸作戦で戦死、御自身の健康も損ねられていた時、次男が親にそむいて女給さんと自由結婚し、生活も乱れたので、親子勘当し、準禁治産の手続きをせねばならなかった。

又戦争が劇烈になるにつれて食品会社の経営も難渋になり、〇市を引き揚げて郷里の田舎で商売も工場も縮少せねばならなくなった。そして三男に望みをかけて、老病軀に鞭打ちながら家業に励んでいられたが、三男は親の期待が大きすぎた点も多少原因になってノイローゼになり、N氏の希望は次から次へと崩れて行つた。

そうこうしているうちに、N氏は病が重くなり、自分の死を自覚されるようになって、深く自分を省みられ「我家の再建を唯一の願ひとして種々と腐心努力したけど、今となつては何もたのむものはない。かねて近角先生からお

い。煩惱具足の身が火宅無常の世に処して織りなす一切の

そらごとたわごとを憐れみたまうて、お恵み下さるお念佛のまこと一つが、やがて氷を水にとかすように罪障を転じて慚愧と感謝の涙に転化して下さる、その絶対の真実者を渴仰せられた金言である。そこに虚仮の身も救われ、また一切有縁の人々もそのところを得しめられるのである。

四九年六月下旬、稿了。

人みな党(たむろ)あり

初代アメリカ大統領のワシントンが引退の辞

「徒党と党派の精神は不幸にして我々の性質から離れられぬもので、人間性の最も強い感情に根ざしている。

多少もみ消され、統制され、抑圧されてはいるが、それは種々の型で、あらゆる政治に存在し、民主政体において最もいむべき最大の敵である」

正善で身をまもるより、集団や党派をもつて身を守る方が容易で、安心感が強い。善悪正邪の判断の謬りがそこから生れる。

(和の倫理、金治勇氏述)



あとがき

長かった梅雨もようやく明けて青空が珍らしく仰がれる今日ですが、やがて酷暑に移り、海や山が恋ひしくなるでしょう。各地で夏期佛教研修会も催され夫々の道にこそしまれることでしょう。

さて本年は池山先生の三十七回忌になりました。京都の一道会も十月の第四日曜に何かと趣向をこらしておられることと思いますが、去る六月三十日に、名古屋の鬼頭康彦さんとそして岡崎の杉浦豊さん津田よし子さん等々の御尽力によって、池山先生に二度も御講話をして頂いた岡崎公園内の巽閣で、記念の佛教講演会を催されました。当日は四十年前の岡崎親鸞会に御縁の深かった榊原師御夫妻、滋賀県今津の保木俊雄師はじめ、高松の松本解雄師、そして非常にお忙しい西元宗助先生御夫妻も出席下さいまして、感銘深い御信味をお頒ち下さいました。私は風邪をこじらせて不安定な身を唯御わびとお礼のお挨拶に出席させて頂きました。満堂の巽閣は四十年前のままでの姿で、池山先生の御姿がどこかで照覧下さっている感がまざまざといたしました。

西元先生は「如来我になりたもう」と如

来の衆生化の大悲により、衆生の如来化の不思議のあらわれることを述べて下さり、保木先生は「信樂開発の一念」について力強く語られ、松本先生は「念仏は時と処を超えろ」という味いを妙好人と云われた鎌田晃氏の歌等を引用されて開陳され、三十七回忌の今日、池山先生に御遭い出来る、そして如来聖人にも時空を超えて本当にある世界のあることを語って下さり、榊原師は「よき人にあり喜び」を、感涙の中に詳しく話して下さいました。私はテープで病床にあって聞かせて頂いております。またとなひ、千載一遇のよい御法縁を恵まれました。

池山先生が巽閣で「雨が降る降る岡崎の城に、花を催す雨が降る」と開口一番御法話がはじまった由も榊原師からお聞きし、四十年後にこの法話の集いの花と開いたことを随喜させられました。

本月号に、東京の都崎先生から六高時代の先生の追憶文を頂き、又京大の東昇先生からも生涯の師としての先生の信徳を書いて頂きました。御味読下さいますように。私は七月の中、下旬と八月一杯を休ませて頂いて体調をととのえ、秋風を待たして頂いております。どこかいて悪いのではありませんが、八月は例年通りの体みとさせて頂きましたご心配下さいませんように。

△御案内▽

○一道会例会。母月、第一、二、三日曜午後一時半。南区駈上町二の八八一道会館

※市バス、新郊通り一丁目下車、東入る三筋目、左入る二軒目。

※地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。

※名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小椋町二丁目四番地。

※市バス、御器所通り下車。

※栄町より、枳中（いりなか）行き、北山下車。

※名駅より、⑦妙見町行き、御器所通り下車。

定価 半年 五〇〇円（送共）
一年 一〇〇〇円（送共）

編集・発行人 名古屋南区駈上町二ノ八八 花田 正夫

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 電話八二一局七〇三七番

発行所 慈光社 名古屋南区駈上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番 郵便番号 四五七